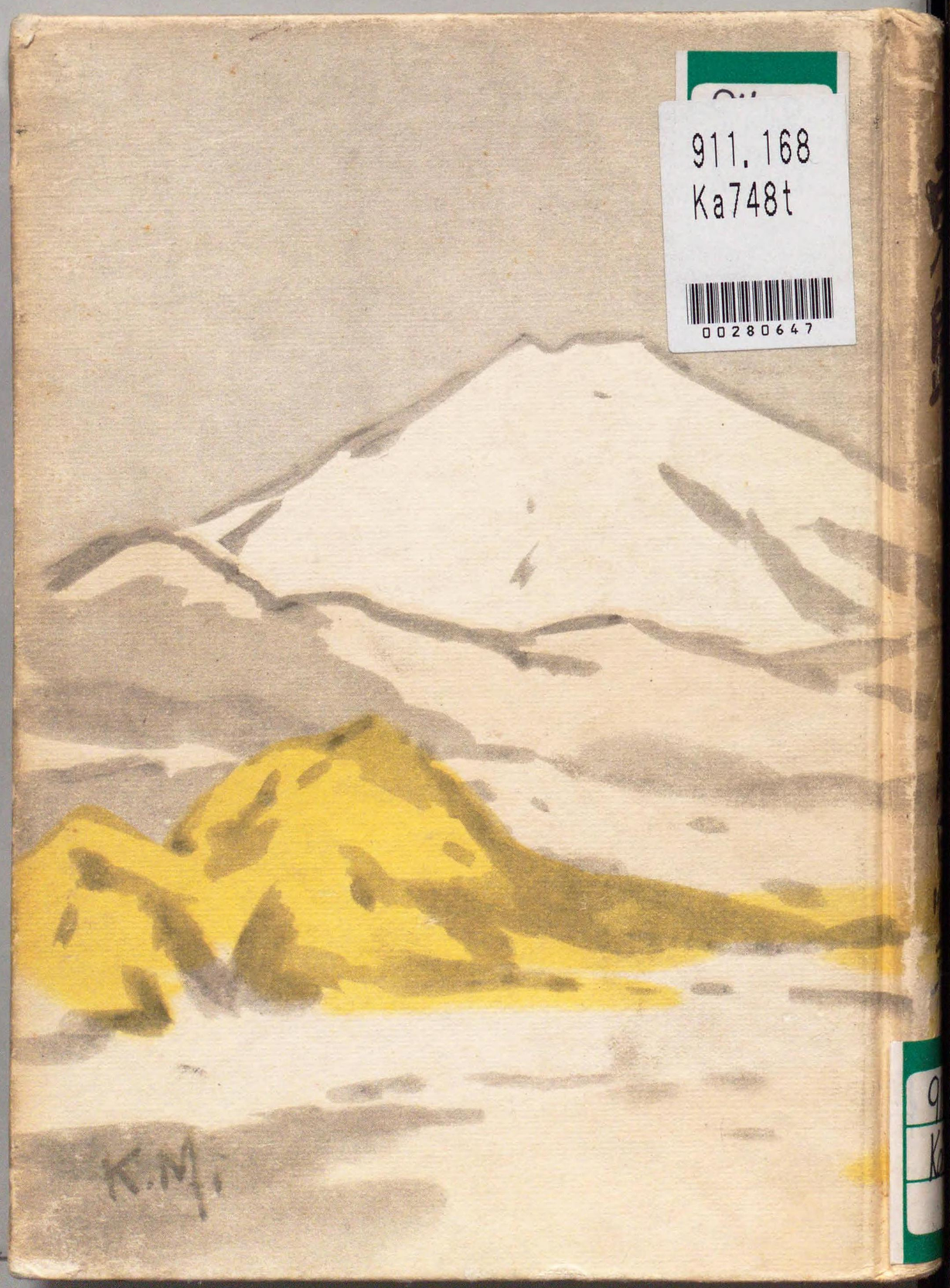


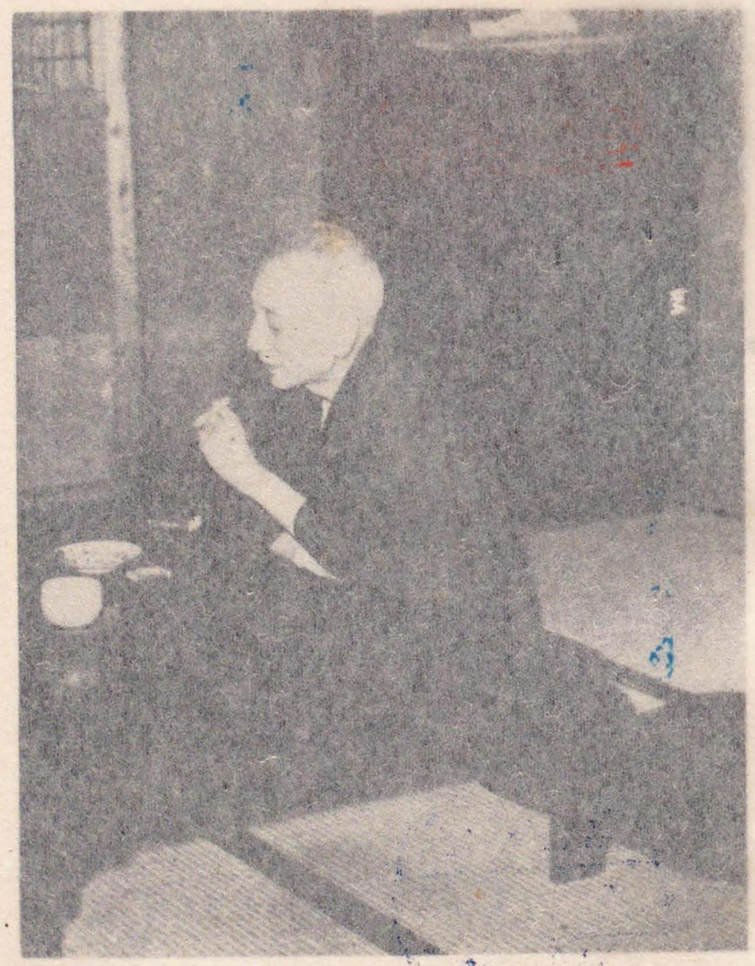
911.168
Ka748t
00280647

川田順著

歌集

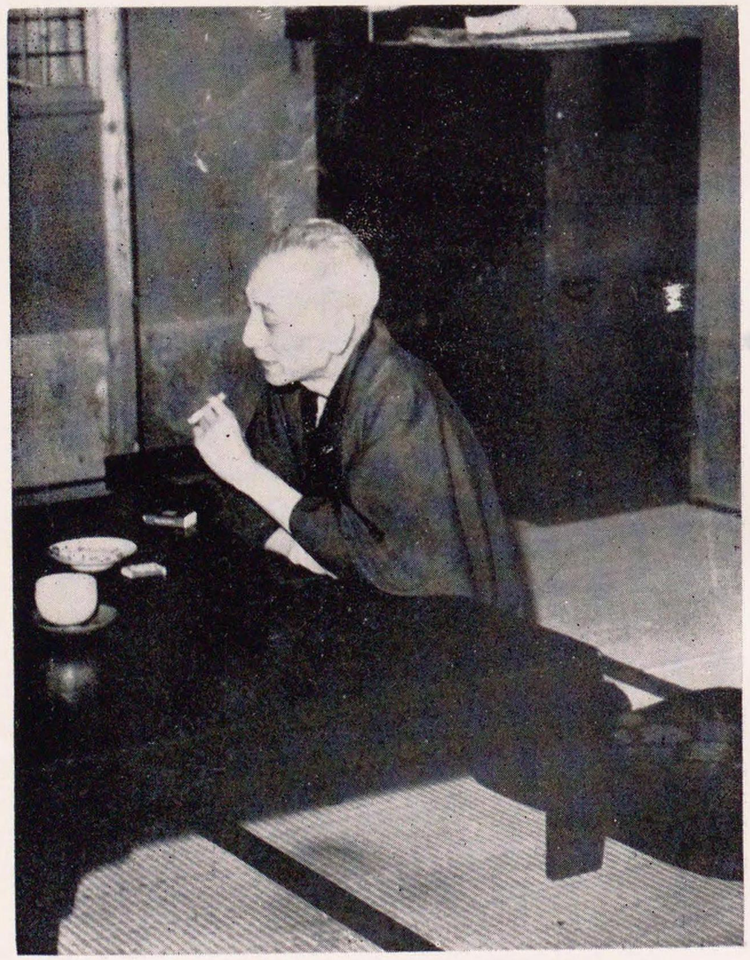
東歸

長谷川書房



国立国会
27.11.-1
図書館

280647



国立国会
27.11.-1
図書館

280647

911.168-Ka748t

目次

昭和二十二年
穂積東宮大夫に……（三首）……一
雑詠……（一一首）……三
奉迎鶴駕……（四〇首）……七
呂紀の畫……（七首）……二一
海上……（一三首）……二四
吹上御苑……（一一首）……二九
裸心……（四七首）……三三
昭和二十三年
御題春山……（一首）……四九
反省……（五首）……五〇
裸心……（五三首）……五二

昭和二十四年
東歸……（一五首）……七〇
掬泉居春……（一四首）……七六
掬泉居夏……（一一首）……八一
東宮を偲び奉る……（四首）……八五
强羅の半日……（五首）……八七
雜詠……（七首）……八九
掬泉居秋……（一九首）……九二
妻の歸洛……（一四首）……九九
掬泉居冬……（七首）……一〇四
昭和二十五年
掬泉居新年……（六首）……一〇七
雪解……（一〇首）……一一〇
國府津……（七首）……一一四

雜詠……（一四首）……一一七
西望……（九首）……一二三
徒勞……（五首）……一二六
尙之來……（七首）……一二八
秋の一夜……（七首）……一三一
偶感……（一一首）……一三四
岡の冬……（一三首）……一三八
十二月二十四日……（二首）……一四三
昭和二十六年
辛卯年初……（六首）……一四四
實朝忌……（五首）……一四七
餘寒の頃……（一三首）……一四九
春愁……（五首）……一五四
春深し……（五首）……一五六

哭穂積重遠博士……（四首）……一五八
秋思……（九首）……一六〇
むささび……（五首）……一六四
相模灣……（五首）……一六六
森戸川……（五首）……一六八
蜜柑山……（四首）……一七〇
刈田……（五首）……一七三
冬山……（八首）……一七四
後記……一七七
著者略年譜……一七九

三宅克己畫伯裝幀

東歸

昭和二十年

穂積東宮大夫に

よきやうに奏(まを)したぶべしにひとしの言(こと)祝(ほが)ひに
もまるらぬわれを

皇子さへにうらさびまさむ釣りたまふ魚も乏しき冬の海にて

この皇子のゆくすゑ思へばうら安しいくさの強き御世は過ぎたる

雑詠

何事のよきことあらむやみづからを欺きながら年祝ふなり

幼らをつれて吾が觀る正月の動物園の鶴はきたなし

北ばかり冬は吹くかとおもひしを艮(うしとら)へ雲の動く日もあり

きはまりておのづからなる姿かも地(つち)より立てる冬木を見れば

法然院三首

立てきりし白き襖のこなたより上人の居間へ聲をかけたる

著(き)ふくれて白き襟巻したまへりあな寒やとてわれも坐りぬ

桃山の畫ぶすまもあるみ寺ながら上人の居間は白きからかみ

失ひし幾つかの島めぐり來て日本(やまと)の春をつばくらめ飛ぶ

家びとら怪しみもせずこのごろの癖となりたる吾が歎息を

老いづきしわれら仲間はあふごとに話はなくてためいきをする

石崎光瑤畫伯を悼む

大方は描き終りたる畫ぶすまに彩色なきままの翡翠ひとつ

奉迎鶴駕

三月七日京都大宮御所にて

日の皇子のみくるま著きし今日よりぞ一日一日に春は濃くなる

三月十四日諸博士と共に御茶に召されて

相寄りて御召を待てる梅の間に蹴鞠のあそびつばらにきこゆ

みそなはす古き遊びの飛鳥井の蹴鞠がすみて
われらは召さる

日の皇子を拜み奉りてかへるさはふる霙さへ
寒からなくに

三月十九日修學院離宮に供奉して

女院の御化粧の間は鯉の圖をゑがきし杉戸い
まだ古りせぬ

下の中の上の御茶屋とゆくらゆくら登り來て
春の山にむかひぬ

見はるかす都のそらのくれなゐの霞ながれて
淀野に及ぶ

ほそばしら御茶屋の軒をかろく支へ白き障子
に春の日の影

樹がくれてひびくは林泉のいづみかもみ垣の
そとの溪の流れか

わたり來し林泉のみ池の中島は老木の松のひ
とりして占む

み池の岸そぞろ歩きぬ春になり蝶を見たるは
今日が初めて

水淺きなぎさの底にひとすぢの濁りを引きて
鯉泳ぐなり

三月廿一日雨中大原行啓

庵室にとほりたまへばみ供らも春の小雨にぬ
れし靴を脱ぐ

雨けぶり寂光院の下にしてみ還りを待つみ車
しづか

同日の夕御召によりて參殿す

ささなみの近江あがたの司よりたてまつりたる鯉の大きさ

生きてをるよ動きをるよとみ手づからみ池に放つ鳩の海の鯉

賜はりし眞鯉の動く竹籠をわが手に提げてまかり出でつつ

東宮にたてまつりし近畿詠草の中より

佛らの目見にもしるし寧樂の御代は國稚くしてこころ匂へり

ひとむきに唐をまねびし寧樂びともおのづから成せり國ぶりのもの

青丹よし寧樂のほとけのもろもろにまぎれもあらぬ日本が匂ふ

池のべの扇が芝のわづかなる春の小草にさす
夕日あり（宇治平等院一首）

いしずゑを掘りおこしたる藤原の大宮址は又
も春草

微かなるみ佛の笑みにしづめられ念（おもひ）むなしく
われ佇ちにけり（法隆寺四首）

このみ佛ここに据ゑられてその後の千年（ち）の逝（せ）
きを關はらぬ如し

み佛のひとり立たせる夢殿をわれは出で來て
しづかにとざす

しづけさを亂す畏れて出でて來し夢殿の扉に
蜂のすがれる

大悲閣おりて大堰の川橋を渡りはてねば小雨ふりきぬ（嵐山三首）

春の雲をのへの杉に低く居てあなしづかなる嵐山あり

春の川の片岸つきて溜りゐる筏すくなし小雨ふりつつ

みづとりの鴨川柳のこれるはすくなけれども青みそめたり

川すぢはゆふべの霞深くなり人おぼろ行く下（しも）の橋上（かみ）の橋

すめらぎの國つ都のうしとらを護りし山はいまも雲湧く（叡山）

春さむき峽の平（たひら）の寺二つその一つには尼ばかり住む（寂光院三首）

この尼ぜ平家のはてを賽者らに日々語りつつ老いにけらしな

みささぎにぬかづきて寒しありし日の諸陵頭（しよりようのかみ）の子にしてわれは

みささぎの前の小溝の泥土よりやぶくわんざうがむらがりて萠ゆ（安樂壽院五首）

このみ寺の沙羅の蔭にて失せまししその日すなはちいくさ起りぬ

城南（ぜいなん）の離宮のあとの草に居て美福門院の祕密おもはむ

わが拜む阿彌陀如來はその眼もて美福門院を
見たまひにけむ

花すみれかたまり咲きて苔庭のとび石の根を
紫にせる

呂紀の畫

東山法然院にて

寺書院春のひるにてとこの間の壁を占めたる
唐畫(からゑ)のきぎす

み山木ゆ咲き垂れし花のしら藤と水のほとり
の春蘭の花

垂り花の藤のしたなるいはほには赤き脚立て
雌雄(めを)の雉子(きぎす)をる

たくましく岩に爪立ててきぎす居りその岩の
根に春蘭の花

うつくしき雌雄の雉子が岩に居て咽ぶばかり
の溪の春かも

さぬつどり雉子(きぎす)を描きし唐(から)の畫のあでやかに
して寂びにけるかな

この寺の代々のひじりのめでましし雉子の畫
掛けて今日は樂しむ

海上

四月十七日午前大阪港を出帆して横濱に向ふ

紀の沖を暮れて航(ゆ)きけり山火事の熾(さか)んなる火
が海へ近づく

山火事の火焔(ほのほ)くれなるに動くなべ潮之岬の燈
はにぶきかも

古座川の谷かも那智のみ山かも暮れたる海の
眞北にし燃ゆ

海のをちの山火事の火はくろき夜の浪を焦(こ)が
して西へ延びつつ

紀の山火事夜すがら明日も日もすがら熄まざ
らむわれは甲板くだる

憤りこらへかねつも寝ねがての夜はふけゆき
て遠州灘か

翌朝駿河灣にて

國土はいつくしくして山青し大わたつみを航
きつつ見れば

海ゆけばありし日のごと白妙の浪もてゆへる
うましくに日本

うつし身の七千萬が生きむとし惱める國のや
まと島根みゆ

伊豆沖

この島々のさらに南につらなりて失ひし島の
あるは忘れむ

船の舳を煙噴く島へ向けながら伊豆の岬に近
く航きける

三原山の火口のあり處あきらかに見つつ吾が
ゆく朝潮の上を

船下りて焦土を蹈まむ横濱の近づくなべに日
は闌けにつつ

吹上御苑

四月廿三日午後拜觀を許されて

吹上の林泉のみ池の水涸れて野となりしかば
雉子歩める

水涸れしみ池の底の春草は岸の笹生に生ひつ
づくなり

百花(もも はな)は咲き光(て)りながらおほきみの吹上の御苑(みその)
荒るらく惜しも

荒れまさり野となる林泉(しま)をあなかしこ大君の
御(み)眼に朝な夕なに

み池べにわが蹈みわくる笹のおと御座所(おましどころ)にき
こえもぞする

おほきみの御座どころに近づけば雉子(きぎす)が多し
見えて鳴きつつ

み苑には雉子多くゐてをちこちに二聲づつを
鳴きにけるかな

大君のおましどころのあたりにて雉子の羽根
の落ちしを拾ふ

御苑にて

をしどりが泳ぐみ池の岸のべをきさいの宮の
こなた來給ふ

道の隈ひとむら咲ける山吹にみ光儀(すがた)は觸れて
ゆきたまひけり

まのあたり黄にくれなゐにかがよへり椿散り
しきて山吹は盛り

裸心

樫の實のひとり者にて終らむと思へるときに
君あらはれぬ

別れ來てはやも逢ひたくなりにけり東山より
月出でしかば

板橋をあまた架けたる小川にて君が家へは五つ目の橋

夏まけていや鳴き澄ますうぐひすを君が家にて聽く朝のこゑ

親しさは我が家の如くおぼゆなり君が子達のこゑを聽きつつ

吾が方に走り來むとは言ひつつも子らにさやりてたゆたふらしも

ひとりゐのつくづくさびし著るものは著とほし部屋の塵も拂はず

ひとりゐの吾が部屋ぬちの塵ほこり晝の風吹きて拂ふにまかす

文庫の古典の上に塵つもりいまさらものを書く力なし

夏山の夜の青さに見惚れ居りそのふもとには君が家あり

夏至の朝早く來しかばすがすがし門のべにして君が草拔く

山羊小舍に乳飲みに君を率てゆかむ明日を樂しみ今宵わが寢る

吾が髪の白きに恥づるいとまなし溺るるばかり愛もしきのを

山家集に一首すぐれし戀のうた君に見せむと栞を挿む

橋の上に夜ふかき月に照らされて二人居りし
かば事あらはれき

白河の小田の蛙のこゑ近み君とゐる夜のふけ
しをおぼゆ

わが子らの怪しむ目をば憚りて間遠に君はな
りにけらしな

ひとりゐのつくづくさびし君が來て歸りし後
は又ひとりなる

夏燕とびかふ街を汗垂りて君が來らしも時刻
ちかづけり

部屋の戸をひそかに叩く音すればわれ跳ね起
きて帶しめなほす

このごろはいかで遊びてくれぬかと愛しき孫
の高子が泣きぬ

世の相かも吾が行ひのむくいかも我が家のく
らし崩れゆきつつ

吾が子には言はで賣りたる物多し吾が子も物
を賣り居るらしも

ちちのみの父は舊人その子さへ今の世に生く
る新らしさなし

むらさきの日傘のいろの匂ふゆゑ遠くより來
る君のしるしも

吾が娘には隱さず告げて出で來しと言ひつつ
君の日傘をすぼむ

むらさきの日傘すぼめてあがり來し君をし見
れば襟あしの汗

沖つ藻の名張の町にたなばたの今宵わが居り
俊子は遠く

入りがてに佇みをれば君が門ののうぜんかづ
ら夕日さし來る

如意嶽にともる送り火君と見て歸さはさびし
火の消えしごと

吾がまなこ疑ひつつも一すぢの白きをぞ見る
君が髪のなかに

茜さすまひるのほかは逢ひかねて月の夜頃を
行くところなし

君と見ぬ月にしあらば宵々に虧(か)けゆくもよし
闇夜ともなれ

君を送りこの道行きし一昨年(をととし)の或る夜の月の
忘れかねつも

ぬばたまの黒髪匂ふ佳き人に魅入られながら
われ老いむとす

母を思ふ娘はわれを罵りて蛇のごとしと言ひ
にけらずや

この戀を大凶事(おほまがごと)と誰れ彼れのささやくなべに
いや愛(かな)しむも

君が來る川べのみちは犬蓼のくれなるあせて
葛花や白き

くつわむし黍の畠に鳴きいでて暮れはてしかば來ずとあきらむ

あわただしく逢ふ日逢はぬ日すぎゆきて雁來紅の朱(あけ)におどろく

わが床の隣に寢(い)ぬる人なくて君をおもふにさまたげあらず

今日の午後二點の鐘に君來むと凍てしやもりを掃きいだしたり

わが前をいそぐ女の影ありて君かとおもふ冬の夜の月

冬の月ひむかしやまをあきらかに照らして君が家のあたり見ゆ

吾が戀を知りていまさむ街かどの石のほとけに禮して通る

わが歸る北白川の坂みちの小石を照らす冬の夜の月

一年の終りの日にも君が來てなづさひ居れば時飛びゆくも

昭和二十三年

御題春山

宮中御歌會始の選者を仰付けられて

冬やまも春來て靑き山となる世の終りまでかくのごとけむ

反省

勝ち誇りきほひ立ちにし時よりも敗れて後の
國は愛(かな)しき

やまちかき北白川に庵占めていま書くものは
世に出でむやも

わづかばかり人に知られし名を持ちて苦しむ
ことのあはれ愚(おろか)や

いまのわれに人を憤るこころあり省みること
いまだ足らねか

老い痴(し)れし吾をいたはる子らはあれど勞はり
足らず妻にしあらねば

裸心

君が家の年祝ぎ酒に醉ひ足りし去年を思へば
今日のさびしさ

君が來て掃きてくれたるこの部屋に坐りて居
れば新年めくも

夏もなく秋なく冬もあらぬわれ暦を見れば明
日は春立つ

先生は痩せたまへりと理髪師のむすめ今朝言
ふ何も知らずて

押し默りわれは坐りぬこの戀を遂ぐるつもり
かと友のおどろく

自殺するきはまで行きてとどまりし若き日の
ことを友けふ話す

暗き夜のそこらここらに閃(ひら)めきてわれを罵る
舌の紅さよ

うしろより罵る聲の多けれどあなかたじけな
泣く聲もきこゆ

逢はぬ日をかぞへてさびし二日三日四日五日
にもなりにけるかな

吾命(わぎのち)の殘りすくなき暦より君に逢はざる日を
なくなさむ

わがこころ環(たまき)の如くめぐりては君をおもひし
初めにかへる

茜さすまひるの逢ひの時たちて夕べの四時の
鐘ひびくなり

君が來て今の今まで坐りゐしたたみの上に吾
が臥(ね)まろびつ

相觸れて歸りきたりし日のまひる天の怒りの
春雷ふるふ

死なむと念ひ生きむと願ふ苦しびの百日(もも か)續き
て夏さりにけり

むらぎもの心みじかきわれなるを君に依りて
は堪へに堪へつつ

むらぎものこころ烈しき束男(あづまを)に戀ひられなが
ら君のしづかさ

いや高くあがりゆく雲雀眼放さず君の見れば
われはその眼を見るも

五月野の青草のなかに相寄れば天道蟲が君の
手を這ふ

血を分けしただ一人なるいもうとは鎌倉に居
て吾が事を憂ふ

いもうとのふみ取り出でて今宵も見つ君に逢
ふなと書きてあるはや

君が飼ひて去年の梅雨季に死なせたる兎の如
くわれも死にてむ

若葉より青葉に移る時の逝きすみやかにして
いのち縮まる

いづこにていかに死なむと日ねもすを考へ疲
れ夜(よる)は眠りぬ

ひそやかに身のまはりをば片附くるさみだれ
の夜のふけにけらしな

吾が顔は暗くぞあらむ起きてより寢るまで一
つことを思へば

死ぬることを決めし心の吾が顔に見えもやす
ると怖れつつ逢ふ

ちかごろは自(みづか)ら殺す人多し王妃の父もゆくへ
知らずも

出でて往にし王妃の父をその後の噂は聞かず
秋立ちぬなり

おきて來し子供のための針仕事眼は疲れつと
言ひにけらずや

子らをおきて君が出でにしその家は東山べに
まのあたり見ゆ

普門品秋の夜の燈に寫し居る精進の君をひそ
かにも見む

今宵この清水寺のうてなにはわれらばかりを
月ぞ照らせる

炷き籠る香の匂ひは月かげのあかき外の面に
漏れてただよふ

滿ち照らふ月の光にうしろむけて君久しくも
み佛を拜む

くぐまりてみ佛を君の拜むなべ月のひかりに
吾が佇ちつくす

君よりもわれ罪深し照る月のあかきに佇ちて
み佛を怖る

みほとけが坐りていますの扉の奥の闇は靜けし
月光よりも

十六夜の月あかあかと出でむとす西山に來て
東山を見つ

月見より夜ふけ歸りて手探りに部屋に入りし
君燈をともしける

しらたまの君が肌はも月光のしみとほりてや
今宵冷たき

有明の月うつくしとひどのより出で來し君の
言ひにけるかな

この戀は友を裏切りぬ二重にも三重にも罪の
おもきわれかも

つひにわれ生き難きかもいかさまに生きむと
しても生き難きかも

膽(きも)ふとき戀をしながら膽ちさきわれにもある
か世の中を怖る

その時の吾が血の附きし普門品見じとは思へ
燒き棄てもせず

これの世に再び生きてはじめての外出(そとで)の道の
冬の夜の月

君を見むとゆく一すぢの道の上に嚴(きび)しく光る
冬の夜の月

たまきはる命うれしもこれの世に再び生きて
君がこゑを聽く

垂乳根の母なることを忘れよと今日は言はむ
かも鬼にもなりて

ひたやごもり頭(かしら)痛めば北やまの雪を見むとて
門に出でたる

わが庵ゆ北へ北へとゆくみちは山のべにして
心おちつく

人の世の嚴(きび)しさに吾が堪ふるとき冬の雲くろ
く動きつつあり

昭和二十四年

東歸

三月末、京都より國府津に移りて

足柄のふもとの田居に膽(きも)ふとく新らしき生(よ)を
創(はじ)めなむとす

移り來て荷をほどき居る縁側を蜜柑やまより
人に見られつ

わが門(かど)の山井の清水あふるるを見らくゆたけ
し出で入りごとに

庭さきに七厘すゑて煮炊(にたき)する妻のすがたも目
馴れ來にけり

雨のふるさ夜中にしてさめをれば相模の國の
片田舍なる

事無しに生きむと願ふここにさへ世の人言は
なほも追ひ來る

足柄の此の面の國の風を引きてわれ既に快し
妻のなほらぬ

わが妻はわれを富めりとおもはねど貧しとも
將た思はざるらし

わが側に坐れる妻は鍋墨の附きしその手をか
くすことなく

鮮らしき鰤のひときれを刺身にしけふの夕餉
のゆたかなるかな

蛙鳴く田居の夜ふけに筆執れる父の生活(くらし)を子は知らざらむ

わが夢は現(うつつ)となりてさびしかり田居のすみかに枕を並ぶ

西の友ら疎くもなるかひむがしの昔なじみも多く殘らず

いもうとが近き鎌倉に居るゆゑに心強しと妻に聽かせつ

おのれから事を起して相模野に佗び居の今を悔ゆと言はめやも

掬泉居　春

春の雪はだらに殘るやまなみの低きところやあしがら峠

わが背戸の草生にまじる花すみれ紫うすく匂はざりけり

初蛙鳴く日と鳴かぬ日とありぬ而して日々に春は更けゆく

背面なる枯草やまの日だまりに野蒜を掘りぬ手の臭ふまで

相模野の小岫の野蒜まづしともうましとも言はで妻の食べをる

桃畑の桃の木矮しそばに佇ちて枝々の花が眼
とたひらなる

蛙鳴く相模の田居にわが妻もおちつくことを
疑ひたくなし

ゆくりかにもらひし花の牡丹活けて佗びゐの
部屋を燿やかにせり

わが門の山井の水にこてまりの花を漬けたる
は妻かも誰れかも

裏やまのうるしの大木見えぬまで咲き絡む藤
はなほ盛りなり

吾が見しは既に十日も前のこと今日蛇を見て
妻のおびゆる

時としてまむし這ひをるあしびきの山の井の
邊にしやがの花群

蜜蜂の巣箱の前に飽きもせずかがみてゐたり
眠たくなるまで

わが門は蜜柑山より流れ來る小川の水にさく
ら散り浮かぶ

掬泉居　夏

南かぜ海より吹きていちめんの穂麥ばたけに
潮の匂ひあり

夜をふかみ遠き蛙のこゑきこゆさらに遠くに
浪のおとあり

巣箱より遠からずして日だまりに分封の蜂の
むらがるを見つ

臙脂いろの爪革つけし妻の下駄雨のふる日は
そろへてありぬ

潮騒のたかくきこゆる今日の眞ひる濱べに來
ればさまで浪無し

崖下の我が家の裏は陽を疎み踏みどなきまで
毒だみの花

百合の花しぼみつくして裏の崖はもとのごと
くに青芒のみ

青田中ひとすぢにゆくこの道は不二火山灰の
埃立つなり

足柄の嶺にゐる雲のなほ燒けて夕餉の後もし
ばらく暑し

ゆふだちに水嵩のふえぬ門の小川われは出で
來てもの足らぬなり

涼みすとこよろぎの磯邊歩きしが妻は手帛を
なくして歸る

東宮を偲び奉る

吾が作る歌のこころは日の皇子に傳へ奉りぬ
畏かれども

日の皇子のいでましの濱わが庵ゆ山一重にて
遠からなくに

青田越しに今朝も吾が見る不二の嶺をみそな
はすらむわたつみの濱ゆ

いまはとてまかり出でし時あなかしこ御車寄
に佇たせたまひき

强羅の半日

足柄の箱根のやまのおくに來てありのままな
る茂吉と對ふ

茅蜩の鳴くはおほよそ時刻を定めて日に四た
びとぞ茂吉の語る

じんのざうのやまひは長崎時代からと醫博士
の大人あきらめて居る

おなじ齡(とし)の茂吉の前に恥づらくはわれの腎(むらと)の
すこやかなること

山菅のねもころころにいたはりて長生(なかいき)せよと
いふほかはなし

雜　詠

わが戀を映畫にするといふうはさ耳に痛けど
せむすべなしも

いかさまに映してわれを嘲るか笑ふか知らず
せむすべなしも

わづかばかりの電燈料の請求書つくゑの上に
昨日からあり

この岡にて甲斐の落武者討たれしといひ傳ふ
るはまことかと思ふ

舊き友加藤辰彌の身のまはり妻なしにしてこ
の清らかさ

若き妻わが持つこともわが友の獨り居ること
もよしや世の中

わが友の無想庵はも盲目(めしひ)にてお岩稲荷の燒け
あとに住む

掬居泉　秋

蒸し暑き小雨のあした縁にゐて地震（なゐ）の搖りしを知らずありにき

屈託せるわれの眼の前に飛びきたり秋の蚊を喰ふやんますばやし

庭のすみに妻が作りし赤茄子は幾つ取りけむ今日にて終る

どくだみの花の終る頃ときそめし臭木の花が今日なほ赤き

吹きつのる颱風のなかに鵙（もず）が來てたまゆら鳴きし聲は徹れり

朝間より晝まで夜まで吹きとほしあかとき方
につひに衰ふ

樋の水は常のごと澄みて流るなり寢ぬ足らざ
りしわが眼を洗ふ

けものかも山の禽かもこつこつとあらしのあ
との屋根を歩める

わが妻は道まで揚げし高潮のあと蹈み來つと
かへり來ていふ

伊豆の山がこだま反(かへ)すや相次ぎて曇る沖より
海鳴りきこゆ

北窗をとざさむとして草崖(くさがけ)にやまかがちの尾
の隱るるを見つ

一年をこの稲のため働きし百姓の背に稲の搖れて行く

柿と柚子と菊と雞頭と眼にを見て歩きゐしかば次の部落に來つ

垣根たかき大百姓のこの構へ刈り入れどきをただ閉かゝる

刈り取ると干すと運ぶと昨日今日稲に關はらぬ人はあらなく

稻扱きの女を見れば手足をば時の間惜しみ忙しく使ふ

あしがらの山根に及ぶ垂穗田を二日三日にて刈田となしつ

こもりゐの軒に吊るしし玉葱は冬まで保たず
食ひ減らしつつ

郵便を出しにゆきたる時の間にかへりは暮れ
て刈田夕靄

妻の歸洛

わが妻が子らに逢はむと遠行く日稻扱くをん
な野らに忙しげ

百姓を見て下されと稻扱きの埃のなかにをん
な笑ひぬ

遠く行く妻を送りしかへりみち枯草なかの蛇
に石打つ

寝たる吾が小夜床に來てわが妻の旅立つ前を
泣きし偲(しの)ばゆ

わが妻の子らに戀ふらく思ひやる心持ちなが
らわれはさびしき

280647

久々に子らに逢ひに行く妻なるを何しかも吾
がおだやかならぬ

ものぐさの男やもめの夕めしは八時になりて
鷄卵(たまご)を茹(ゆ)でつ

部屋のすみに叩き殺しし油蟲そのままにして
われは飯食ふ

机よりはじき飛ばしし冬の蜂のろのろと又這ひて寄り來る

遠妻を偲びて佇(た)てば死火山の外輪山が眼に遮れり

ひとりゐの厨の戸棚あけしかばねずみを殺す燐が臭ひぬ

ひとりゐもやうやく慣れて或る時は夫婦(めを)てふものを考へなほす

妻と離れひとり居る間にこの岡は何事もなく冬たけゆけり

こがらしはかかる音して吹くものか岡の朝明(あさげ)に耳そばだてつ

掬泉居　冬

朝晴れてむかうの山の山根までひろき冬田のたてよこの畦

冬田ゆく道のほとりに亞米利加の輕車の埃あびて吾が佇つ

さしのぞくわが顏ひとつ映りゐて冬の山の井に生けるものなし

蟲の音はみな亡びたる霜夜にて天つ空ゆく雁のこゑあり

わが妻は夜なべ仕事の縫針(はり)をやめて雁のこゑ聽くは初めてといふ

明けて來るけはひしながらなほ暗し遠き鷄の音は下曾我村か

除夜の鐘を撞く寺もなき田居にして宵のうちよりわれ寢ねむとす

昭和二十五年

掬泉居

新年

田居にして二人ばかりの年立ちぬこの樂しさを妻もうべなふや

歳の旦(あした)わが出でくれば門のべに自然薯掘りし
深き穴あり

車曳きて我が家のしたを通りゆく曾我村の牛
この朝も見つ

あしがらに雲うごく日の多けれど吹雪の雲の
速度はちがふ

霜を蹈みて明治神宮に今朝まゐる人すくなき
か或(ある)は多きか

ふくるままに相模の海の潮騒の大きくなりて
元日終る

雪解

五島ひとみ嬢告別式、立春第二日

雪どけの丘の坂みちなづみ行き哀しみの家に
足は近づく

密葬の柩車いでゆきし跡しるし丘の小みちの
泥ふみ來れば

日の皇子の賜はりものは神棚の供御のなかに
て吾が眼を捉ふ

英吉利の詩人の弔辭少女はいま天翔けりつつ
享け聽く如し

生れし日より知れる少女に玉串を捧げむとし
て老の手ふるふ

小柄にてうつくしかりし少女あはれ立春ちかく風を引きたる

才(さえ)あるが命みじかく死にゆくをかくもまのあたり見むと思へや

この父をこの母をしも超えて行かむ少女なりしに春の雪と消ゆ

この酷(むご)き痛みに堪へて幾十とせなほ生き行かむ父母なるはや

さ丹つらふ少女はあらず父母の悲しき顔を見て歸るのみ

國府津

源義家に屬きしありそべの七戸の部落のあと
にわれ住む

この濱に關所設けて錢とりし五百年まへは杏
かなるかな

このさとも少しは史に殘るべし病みし宗祇が
一夜泊りぬ

明日死なむ自然齋宗祇のまくらべにこの荒磯
の浪はひびきぬ

ここに病み箱根まで行きて仆れたる宗祇の齡
は幾つなりけむ

けぶり絶えさびしくなりし大島の三原の山に
むかひてぞ住む

ここに住みわれらの徒名高けれどおのづから
にしてやがて聞えじ

雑詠

梅の花小溝を流るかまくらの御家人が住みし
山ふところに

食器棚の上に活けたる紅梅の花はくろみて棄
てられにけり

路ばたのこの石にわれは腰掛けて憩ひたりけ
む移り來し日に

かにかくに一年住みぬこの石に腰掛けて今日
は春田うららか

軒端より常に吾が見し足柄の矢倉が岳のふも
と今朝越ゆ

あしがらの關本村を吾が過ぎて坂にかかれば
筒鳥鳴くも

吾がことを書きし直哉の小説を讀みけむ友の
われには言はぬ

子を負へる老いし男のこつじきに錢やらむか
と佇ちて惑ひぬ

われいまだ貧しからざり町歩き要らざる銭を
ふところに持つ

かへり來て鏡覗くを妻は見しや田舍床屋に髪
を刈りたる

蛇骨川の橋ゆ見おろす石谷はむかし見しより
淺くおもほゆ

莊嚴に煙を噴きし島火山わが生の間にもすで
に衰ふ

おきろなきこのわたつみは底ひ深く地震を潜
めてしづかに湛ふ

名も知らぬ川なれど海に入るところは何かゆ
たけくて我を佇たしむ

西望

こつこつと大阪にして築きにし吾が半生を棄
てて來にける

吾がことをおもはむ人は何處(いつこ)ゆも大阪に多し
と友の言ひしを

歸るべき西の京(みやこ)とおもはねば子らに與へ來つ
家も財(たから)も

ここに來ては西のこと皆忘れよと箱根の山の
立てりけるかも

巣鴨より出で來し友はこの戀を遂ぐる勿れと
強く諫めき

巣鴨より出でにし友はふるさとの河内田舍に
病みて失せにき

住友の家の子らはも吾がことを悲しみながら
しりうごとせむ

夜のふけを東海道急行列車過ぐ知れる友らも
往來(ゆきき)すらむか

國府津には停まらで汽車の過ぎにしと住友び
とのいひわけの手紙

徒勞

あくせくと新聞社めぐり燈のつくころ數寄屋
橋をば再びわたる

待たされて受付の前に立つ久しここまで我は
おちぶれにけり

傲然と背を向けて椅子によるる男わが入り來し
を知らぬさまにて

東京にてよきこと何もあらざりき海べの町を
夜ふけて歸る

さ夜ふかく我が家をさしてかへるさは逆さに
立てる北斗に向ふ

尙之來

妻の顏に隱しきれざる喜びあり子が來るといふ手紙なるべし

生みの母の側に坐りし少年はしばらくわれを憚るごとし

その父に酷(きび)しく似たる目見(まみ)をして尙之(たかゆき)はしばしわれを窺ふ

小田原の學校に入りて友達をいまだ持たぬかこの子さびしげ

我が家に少年も來て住みしよりときどき笛をふく聲きこゆ

この妻にその子供らに吾が負へる罪代(つみしろ)おもし
背の曲がるまで

苦しびをせめて罪代と堪へて來し一年(ひとせ)の間に
妻もふけたる

秋の一夜

十月三日、眞明林和に示す

善き哉と君はよろこぶこの家に吾が妻の子も
來て棲みけるを

重荷かと問はれて返す言葉なしくだちゆく夜
の雨を聽きをる

相識りていくほどもなきこの友の俠氣はわれ
を泣かしめむとす

揚子江の岸山にして苦力らと木を伐る仕事四
年せりてふ

わが妻が君に着せむと取り出でし洗ひざらし
の古寢卷はも

今夜なほ秋の蚊多し君を泊めて破れ蚊帳つる
ことのすべなさ

君が住む眞間の古野をわれ訪はむ手古奈の墓
はありもあらずも

偶感

昨日今日凋みかけたるむらさきの木槿のほかに花は殘らぬ

わが舊き友の誰れ彼れ相次ぎて佛になりぬしづかなるかな

侵しもせず侵されもせぬこの國と言擧(ことあげ)しつつ肚に力なし

いらいらと終りに近き波立ちて老は靜かなるものとしもなし

敗れては心力(こころぢから)もなくなりぬ國おもふことを憚るまでに

この邸(やしき)の木がくれ深き古池に鯉の居ることを
今日知りにけり

冬田中わがまへ通る貨車の上に砲を積むかと
目をそばだてつ

ひよどりは鴨綠江へ移動する支那赤軍の如く
おびただし

十字軍に加はることを許されず我等のいのち
全(また)けからむか

進駐軍の士官がくれし鴨一羽はねむしるすべ
も吾は知らなく

吾が食はぬ鴨ぶらさげてさしなみの隣の家に
冬の夜をゆく

岡の冬

わが門を流れてほそき冬川に水成岩しろく現はれてゐる

冬まけて田居へ吹き越す潮かぜに妻のくちびるあれにけらしな

妻とわれ町へ出でゆくをおのづから田圃の道の稻架木が隱す

群れて來るひよどりの聲は朝ぞらに徹りに徹り岡へ近づく

わが軒のまゆみの朱實食ひ散らしひよどり往にぬ半時の間に

岡の夜の月の光ふけて吾が軒にむささびが搔
く爪の音あり

今のわれはせむすべもなしむささびの夜々啼
く岡に妻を居らせつ

わが門に赤き實を持つ柿の木は二本にして稅
のかからぬ

わが門の刈小田に來て子供らが泥鰌を掘るは
遊びにあらぬ

小田の畦の夕日に佇てばわが影をよこぎりて
ひよどりの影ぞ過ぎたる

平凡なる田舍の冬とならむとす山の蜜柑の收
穫もすみて

前やまの矢倉岳にも雪ふりて今朝は全く冬の
不二なり

こよろぎの磯の冬浪とどろきて沖へ飛ぶ機の
爆音を奪ふ

十二月廿四日

東宮賜宴、諸橋止軒獻漢詩、余上和歌

凍てつきし冬の町坂戻りきぬ東宮御所へみち
迷ひつつ

日の皇子はみくし分けさせ給ふなり仰ぎ見ざ
りし三年(みとせ)久しも

昭和二十六年

辛卯年初

にひとしはいささか樂し老いしわれも女禮者(なんなれいじゃ)
をいくたりか迎ふ

今日を來し禮者のなかに吾が友の輪袈裟の姿
清らかなるも

國の四方に吾が持つ友等わびしさはおなじか
るらし賀狀だに來ず

ひた押しに支那赤軍ぞ押し來なる碧蹄館も過
ぎにけらしな

史(ふみ)の上になかりしことを嗟(あな)哉(や)この一九五一年
は見む

正月の机の仕事すくなきをこころもとなく妻
は見てをり

實朝忌

わが庵は崖(がけ)に片寄りて春さむく素枯れし歯朶
のそよぐ風あり

こもりゐのわれ一人修する實朝忌藪に棄てら
れし首をおもへり

殺されむ分際ならず實朝を羨(とも)しといふはおふけなからむ

軒端なる梅の枝より眼を移し枇杷にも花の咲けるを見たり

鎌倉の吾がいもうとも知らずといふ實朝忌はも廢れけらしな

餘寒の頃

避寒地の別莊に呼ばれ花々が甘き呼吸(いき)する温室に入りぬ

北より來て南へと押す赤軍のいきほふなべに春冴え返る

岡の上の七本松のまつかさは昨日も今日も吾が軒を打つ

暮れはてしむかうの山へ直角に田溝ひとすぢ光りて残る

わが軒をむささびが歩くけはひあり春の霜夜の月は照りつつ

打ちやりて摘みしことなき裏畑のはうれんさうに霜とけてゐる

狂女ひとり水弄りゐし町うらの溝川のべを歸りにも通る

足柄山五百重がなかの低山に春になりて降りしはだれ雪あり

青じろき水成岩をすべり落つる春の溪の水やうやく多し

江戸城にも天守閣ありしを知らざりき枯草しろきその跡に佇つ

雅樂寮はただ一つの燈ともりゐる隅の部屋より絃の音ひびく

竹むらにさらさらと降る春の雪は樂しむ間なく降りやみにけり

わが軒端とよもして鳴きし朝雉のひと時もゐず山移りゆき

春愁

昌德宮祕苑の雉を殘るなく赤軍の兵や捕りて
食ひたる

連翹花咲き出づべしやいくさ火は土(つち)のいのち
も燒き亡ぼしぬ

吾が知れる鍾路の妓生消息(たより)なし家もいのちも
いま有りや無し

なまめかしく立て膝をして坐りたる朴山紅の
輕羅しろたへ

韓京に知れる女の死ぬことを戰爭(いくさ)なればとあ
きらめぬなり

春深し

蜜柑の木まだらに黒きこの岡を春山になして
さくら咲き出づ

春ふかみ十七萬尾の姫鱒が放流待つと聞くは
うららか

わが門の湧井のたたへたゆらにて榠樝(くわりん)の花の
影は動かぬ

木の芽立ちし丘畑つづく國原の低きところや
酒匂川流る

ちらちらと陽炎の立つところあり愁を棄てて
その土(つち)に坐る

哭穂積重遠博士

日の皇子に仕へ奉りてこの任は重く遠しと言
ひし君はも

日の皇子は年ゆくままにいや深く穂積大夫を
おもひ給はむ

ちちのみの父に劣らぬ博士にて穂積の家の名
を永くしぬ

勲一等旭日大綬章を賜ふといふ舊きことさへ
君に新らし

秋思

あらたまの年の六年をすぎたれど降伏の日は
昨日の如し

忘れえぬ降伏の年の秋の夜々の月はあやしき
までに澄めりき

ふくろふに襲はれし小禽こゑ立てつ月の光は
しづかなるかな

秋風は長城の外(そと)の蒙古らのさらに西より吹き
來るらしも

この風の吹きすぐるところ一葉だに終にあら
じと西の空を見つ

軒さきに茂りてくろき虫喰ひの桐の葉透(とほ)し秋
のそら見ゆ

秋雨のしとしとそそぐ裏畑をいたちよこぎり
草むらへ消ゆ

秋の蟬ここのかしこの木の幹に殼(から)を殘して聲
絶えむとす

この國を愛(かな)しむ甲斐のありやなしなしといふ
とも愛しきものを

むささび

むささびが啼きて出で來るたそがれの時刻(とき)は
は決まれり必ず啼くも

わが部屋を窺ふがにもむささびの紅き眼光る
軒の木の梢(うれ)に

この岡の木々の茂みをむささびの飛びて木づ
たふ道は決まれる

吾が妻は怖れながらも宵ごとのむささびの聲
に耳さとくなりぬ

むささびの夜々啼く岡に住まむとは思はざり
しが住み親しめり

相模灣

海鳴りする海へおのづから心引かれ曼珠沙華
紅き畦つたひ行く

おきろなきわたつみに向きて砂の上に盲人が
居り寂然と獨り

盲人の側に坐りて打默しむかへる海ゆ海鳴り
きこゆ

盲人は杖を手探りて立ちにけりその足もとへ
渚浪寄す

衰へて煙も噴かぬわたの沖の火山の島に向ひ
をりわれは

森戸川

森戸川に蜜柑の皮の流るるはこの里にして佳き季とおもふ

我が岡に時として來る川原ひわこの川のべにむれゐる見たり

この小川の護岸つくろふ土工のむれ何十萬圓の仕事にかあらむ

日ごと日ごと郵便出しにわたる橋たちどまりて海を見ることもあり

存在の一つにかあらむ昨の雨に海を濁して注ぎ入る川

蜜柑山

まばらなる軒の青樫のあひだより蜜柑いろづ
きし岡つづき見つ

吾が奢侈は季節になりて知人らへ蜜柑を送る
ことばかりなり

蜜柑山へ東京の友の妻子らを案内せしが行事
とならむ

金持は蜜柑山持に限らると町の者らいふ憎む
が如く

刈田

御殿場行の汽車みちの土手越えしかば刈田は
山の根までひろがる

冬田原樹のくろき丘は酒匂川のこちらの岸か
あちらの岸か

かの低丘弓削道鏡にゆかりある伽藍の瓦掘る
とこそ聞け

潮騒せる海のあたりまでひろがりて冬田の原
の灰色は盡く

岡にては聞かずなりにしこほろぎの聲もする
かも刈田の泥に

冬山

思ふとほり歌よみになりて冬山の谷間歩くは
愉しき如し

死火山の外輪山がめのまへに横臥(よこふ)して他(ほか)のも
のを遮る

火口原をみづうみへ歩むこの道に半世紀まへ
の記憶殘らぬ

この道を乙女峠まで馬に騎(の)りし記憶ひとつに
若返りせむ

かまびすしく擴聲器より唄放つ遊覽船を憎み
て去りぬ

廢れたる硫黄精錬所のあたりよりのぼりは急
に石荒くなりぬ

死火山の大地獄谷近くして岩風呂に浸りここ
ろを休む

地獄谷ゆ動きてのぼる硫煙はあたりの山の雲
にまざれず

後記

これは私の第十三歌集である。昭和廿二年四月創元社發行の寒林集に續く。内容は昭和廿二年一月乃至廿六年十二月の五箇年の間に作つた短歌四百五十七首。

廿四年の春三月、私は四十年ぶりで、故郷東京の方面へ歸住したのであつた。その記念として本集を「東歸」と名づけた。「東歸」といふ語は、唐の李渉の有名な七絶の中から拾つた。

敗戰の日から今日に至るまで、我が日本は苦難の道をたどり續けた。このいたましき國狀が、拙吟の背景としても時々現はれる。それから、この期間に於いて、私の一身上に未曾有の問題が起つた。この問題に關

した拙吟のすべては、朝日新聞社刊の孤悶錄に收めたが、本集にはその約半分を採つた。この種の群作は嚴選すべきであつたが、たくさん捨てると恰好が附かなくなるので、やむを得ず寛選した。

七十歳の老翁ながら、私は更に努力して、斯の道を歩き續けねばならぬ。これが最後の歌集とはゆめゆめ思はないのである。

昭和廿七年五月、國府津の掬泉居にて

川田順

著者略年譜

明治十五年一月十五日、東京に生る。父は宮中顧問官文學博士川田剛第一高等學校文科を經て東京帝國大學文科に入りしが、途中法科に轉じ明治四十年卒業、大阪の住友に入社す。昭和五年八月本社常務理事に進み、十一年五月辭して實業界を退く。　○歌歷は明治三十年、十六歳にて竹柏園に入門せしに始まる。大學時代に、小內山薫、武林無想庵等と文藝同人雜誌「七人」を創刊す。大正十三年四月、合同歌誌「日光」の創刊に與かり同人となる。昭和十一年十一月、大日本歌人協會創立、理事となる。昭和十七月三月、歌集「鷲」及び歌文集「國初聖蹟歌」に對し第一回の帝國藝術院賞を授けらる。十九年正月「吉野朝の悲歌」「戰國時代和歌集」「幕末愛國歌」の三部作に對し朝日文化賞を受く。廿一年二月、東宮御作歌の指導を仰付らる。同年十一月廿一日、天皇、皇后兩陛下に「現代短歌の大觀」を進講す。廿三年正月、宮中御歌會始の選

者となる。○著書要目、左の通り。

歌集 伎藝天	竹柏會	大正七年
歌集 山海經	東雲堂	大正十一年
歌集 鷲	創元社	昭和十五年
歌文 國初聖蹟歌	甲鳥書林	昭和十六年
定本 川田順歌集	朝日新聞社	昭和十七年
歌集 寒林集	創元社	昭和廿二年
歌集 東歸	長谷川書房	昭和廿七年
隨筆 夕陽と妻	甲鳥書林	昭和十五年
隨筆 孤悶錄	朝日新聞社	昭和廿四年
隨筆 住友回想記	中央公論社	昭和廿六年
西行	創元社	昭和十四年
西行研究錄	創元社	昭和十五年

西行の傳と歌	創元社	昭和十九年
藤原定家	創元社	昭和十六年
新古今論抄	全國書房	昭和十七年
源實朝	厚生閣	昭和十三年
全註金槐和歌集	富山房	昭和十三年
定本 吉野朝の悲歌	第一書房	昭和十四年
戰國時代和歌集	養德社	昭和十八年
幕末愛國歌	第一書房	昭和十四年
利玄と憲吉	岩波書店	昭和十年
川田順全歌集	中央公論社	昭和廿七年

納本

昭和二十七年五月二十日　印刷
昭和二十七年六月二十日　發行

定價　參百五拾圓

著者　川田順
發行者　大久保秀房
印刷人　大久保秀房

發行所　長谷川書房
東京都台東區西町八番地
振替東京四〇七六一番
電話下谷(83)四七九三番